

# 私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

## ● 阪神大震災を調査する

都市直下型地震には一生に一度会えるかどうかかわらない。

ともかく現地に行き、被災現場を見てみたい。

東海道新幹線は新大阪まで運行していた。新大阪から先の山陽新幹線の新神戸、新明石は運行を停止していた。またJR在来線も不通であった。

真冬の被災地は、電力、都市ガス、上下水道などのライフラインは停止した。

一週間後、私はヘルメットにザック姿でカメラと野帳を持ち、単身・神戸に向かった。

大阪のホテルは満杯で、神戸の宿泊施設は営業停止していた。大阪・梅田のカプセルホテルを探し当てた。

阪神電鉄は西宮まで動いていた。

電車が武庫川を渡ると辺りは一変し、すさまじい景観が現れた。

西宮駅から三宮方面に向かうバスがあったが、早朝にもかわらず長蛇の列だった。

幸い駅前でタクシーを拾えた。神戸の街を縦断し、震源に近い垂水区の親類の家まで被害状況を観察しながらゆっくりと走ってもらう。途中、運転士さんはヘルメットと「報道関係」の紙をフロントに置き、警察による交通規制を潜り抜けて、道路沿いの被災建物や土木・橋梁などの状況を観察することが出来た。同じタクシーに乗って西宮に戻り、梅田まで帰還した。

被災地には首都圏と同じような集合住宅団地や、古い公営住宅、民間マンションや超高層住宅などが多く建ち、それぞれ異なる被害を受けている。

西宮駅前・再開発ビルなどの公共施設では、建設業者が建物を仮囲いし、被害状況が観察できないものも見受けられた。

日本に集合住宅が建設されてから初めて遭遇した巨大地震であり、集合住宅の歴史が書き換えられる現象が被災地に出現していた。

早くしないと被災状況を調査できなくなる。

私一人で被災地・全域の集合住宅を見て回することは不可能だ。集合住宅の維持管理や修繕に豊富な実績があるJIAメンテナンス部会が組織的に被災状況を調査しよう。

帰京後、緊急にメンテナンス部会を開催し、集合住宅の地震被害を調査することとした。



大阪港～神戸港を結ぶフェリーで帰還する JIA メンテナンス部会の調査隊。左から猪狩、柴田、三木、近藤、羽鳥、田辺、など各氏の顔が見える。

約20名のメンテナンス部会員を、2～4人1組のグループに分け、ヘルメットに防寒着、カメラと地図を手がかりに現地に入る。須磨区から芦屋・宝塚まで、活断層と思われる被災の帯に沿って現地に入ることとし、被災地全域をグループ毎に地域割をした。

現地調査に当たり各グループ共通に、以下の事項を確認した。

- ① 建物ごとに、1981年の新耐震設計法以降の建物、1972～81年の第2世代の建物、72年以前の旧々耐震の建物に、建築年代を推定し記録する。
- ② 被害の程度を「倒壊」「大破」「中破」「小破」「軽微」「無被害」に分類し記録する。
- ③ 建物の構造種別を「鉄筋コンクリート造」「鉄骨造」「鉄骨鉄筋コンクリート造」「壁式プレキャストコンクリート造」など構造形式、高さ(階数)を記録する。
- ④ 集合住宅は梁間方向と桁行方向で耐震性が異なる。建物の配置と断層の向きを記録する。
- ⑤ コンクリート打ち放し型枠やモルタル塗り外装仕上材による地震被害を調査する。
- ⑥ アルミサッシ、鋼製建具や玄関扉など二次部材の年代種別と地震被害を記録する。
- ⑦ 余震に気を付けながら建物内部に入り、柱・梁・耐震壁や帳壁、エキスパンションジョイント、建築二次部材や建築設備機器、室内の状況等の被害を写真に収め記録する。

一つ一つの建物を、建築・構造・設備・インテリア・家具や管理組合の掲示類や避難生活、コミュニティーなど総合的な視点で調査することとした。

調査結果はマンション管理組合に解りやすい報告・写真集にまとめ、出版することとした。

### みき・てつ

(有)共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、30年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたバイオニア。